

## 令和3年度 第3回沼田市市民構想会議の概要について

- 1 日 時 令和3年10月5日（火）午後2時から午後4時
- 2 場 所 沼田市立図書館 視聴覚室（図書館4階）
- 3 出席者
  - (1) 委員 栗原明男委員、池田進一委員、青木富士夫委員、小林昭紀委員、田村博史委員、伊藤重雄委員、小野里順子委員、小林美幸委員、小林彰幸委員、林康夫委員、小林好委員、山田龍之介委員、坂井隆委員、佐藤隼人委員、田辺祐己委員、松井孝夫委員  
(16名)
  - (2) アドバイザー 篠田 暢之氏
  - (3) 沼田市 五十嵐副市長、諸田総務部長  
(事務局：星野企画政策課長、生方課長補佐兼政策推進係長、清水副主幹)
- 4 配付資料
  - ・ 次第
  - ・ 令和3年度第1回沼田市市民構想会議の概要について
  - ・ 令和3年度第2回沼田市市民構想会議の概要について
  - ・ 2021年度第3回沼田市市民構想会議
  - ・ 沼田市市民構想会議におけるこれまでの意見・提言、検証について
- 5 概 要
  - (1) 開 会（事務局：企画政策課長）
  - (2) 会長あいさつ田村会長
  - (3) 前回の会議結果について 【事務局から説明】
  - (4) 議 題（事務局：企画政策課長）
    - 1) 市民構想会議についての課題検討について
    - 2) その他
      - ・ 次回の会議日程について  
＜第4回＞ 11月11日（木）午後2時から
- 6 議題内容
  - ・ 詳細については、別紙発言録のとおり

## 【会 長】

皆さん、こんにちは。沼田市では78%の方がワクチン接種を終えている状況です。緊急事態宣言も終わり、そろそろ社会・文化・経済活動が再開しなければならないと感じています。

## 【事務局】

第2回会議につきましては、8月19日（木曜日）午後2時から、テラス沼田4階防災会議室で開催いたしました。前半は田村吉章先生よりDX（デジタルトランスフォーメーション）について、専門的なお立場から講演をいただきました。その後、皆さまより、議題としてご意見をいただきました。詳細は送付させていただいた資料のとおりです。

進行について、篠田先生からアドバイスをいただき、まちづくりという広い視点から、技術論に関わりなく、自由にご発言いただきたいと思います。

## 【篠田先生】

今年度のテーマは、事務局から示されたDXですが、この市民構想会議に付託された課題は沼田市の未来のまちづくりをDXを基軸に考えるというものです。テーマのDXは「デジタルトランスフォーメーション」の略語です。デジタルは数字の0と1の二進法を基礎に、脈絡のないバラバラな値の数字（離散量）を、まとめて構成し直し、これまで、理解できなかった変化や意味を、見つけ出し活用する知識とその技術を指しています。デジタルに対比する知識や技術はアナログです。

アナログは物事の変化を、連続的にひとつの線として結び付け理解（連続量）する数学的思考法で10進法を基にした考え方です。一方デジタルはバラバラにある全く関係性がないように見える幾つかの事実や事象など、様々な社会動向や変化、現象を超えて（トランス）ひとつの塊として編成・構成（フォーメーション）し直すことで、従来手法では見えなかった意味や変化がこれによって見えてくる。この利点を利用して社会活動に活かすのがデジタル技術による、トランスフォーメーションです。

従来には不可能だった問題解決が、この方法によって解決の可能性を押し広げてくれる、社会的な諸課題の解決に役立てられる技術となってきたことから、DXは新しい時代を切り拓く技術と理解されるようになりました。前政権の最後に急ぎ、デジタル庁が国の施策として立ち上げられました。これも政府が中心となって、DXを目指す取り組みです。政府がこの新しい機関創設で具体的に何を取り扱うのか今のところ具体的な詳細は分かっていません。マイナンバーカード等、国もそれらを含めて、取り組みをこれから始めようとしているのが現状です。

地方自治体も国にみならい進められていますが、当面DXは行政の効率化や市民生活の利便性向上に役立てられる取り組み等に絞られると思います。勿論、市民の側から新しい発想によるDXの活用が検討される事は何ら妨げられていませんので、こうした機会を通じて市民の側からもDX活用について、議論することが重要かと思います。

前回、田村先生のお話の資料からも、IT技術を日常生活に活用し、私たちの生活をより良いものにするためにDX技術は社会生活向上の手段になっているとの説明がありました。しかし私は技術の活用には必ず目的や意図があり、その意図を明確にしたうえで、その技術活用の適・否を議論する事が、重要な意味を持つと考えています。

今後、沼田市がより良いまちづくりをしていく上で、DXの利便性や合理性を活用していくことは、デジタル技術を社会的発展に役立てていく上で、その活用の議論が市民の側からもこれまで以上に様々な場面で求められていくと思います。

デジタル技術を暮らしの利便性に役立てる応用例は多くあります。携帯スマホで、外出中でも、自宅にいる愛犬や猫の留守中の様子をスマホ画面で確認できる事や、帰宅時間を想定して、外出中でもスマホ操作でエアコンのスイッチを入れ帰宅時には部屋が快適な温度になっている等がそうした応用例としてあります。

DX技術を社会生活に活かし、私たちの様々な負担軽減を目指そうとする社会構築の新たな技術がDXとの分かりやすい事例紹介もあったかと思えます。オリンピック会場では、運転手がないミニバスが、コンピュータに打ち込まれたルート上を、乗客を乗せて安全に移動できる技術が使われました。これもデジタル、DX技術の活用です。その他にもDX技術を活用した「社会実験」として実証試験のミニバスが、既に幾つかの街で実験走行しています。人口減少を補うデジタル技術の応用が進んでいます。

このように、人間に代わる作業や労働を、デジタル技術の活用によって代替できるようになってきました。部分的であれ、私たちの人生の貴重な時間を必要とする労働から私たちを解放し、負担を軽減してくれる技術になってきたのです。それならばDXは利便性だけの話しか？ということになりますが、このような技術論に全力で走り出す前に、ここで議論すべきことは、まちづくりとしてのDXの目的は何かという本質的な議論が求められており、それが必要です。その意味からも、この会議で、改めてDXの目的を市民の側から明確にする議論が求められていると思えます。

技術は、すべからず私たちの幸せな日々の暮らしに役立つ配慮が求められる大前提に立っています。技術の活用には安全上、技術の独り歩きや暴走が起きないように配慮されていなくてはなりません。特にDXでは個人情報漏洩問題が大きな課題としてあります。長い人類の歴史の中で、現代のデジタル技術は、これまでにない驚異的なスピードで進化し、暮らしの隅々にまで利活用される技術になっています。この技術を必要以上に恐れ拒否する必要はありませんが、他方ではこの技術の扱いの問題にはやはり慎重な取り扱いの議論が求められていることも事実です。

人類文化の発展の中から、必要とされる知恵として成長してきた手法・技術ですから、その技術の持つ危険性を認識したうえで、おおいに活用することは問題ないと思えます。未来の暮らしに必要な社会・文化・経済活動に必要な地域を支え変える未来のライフスタイルの自然な流れとしてDXは求められており、この社会変化に乗り遅れないように準備し配慮することは、誰にも優しいまちづくり（社会づくり）を目指すうえで、大切な視点ではないかと思えます。

ところで、デジタル技術やDXを自然に受け入れている世代はZ世代と呼ばれています。コンピュータゲームと共に成長してきたこの世代は、現在20歳から25歳の人たちを指しています。「デジタル・ネイティブ」世代、「スマホ」世代などとも呼ばれ、生まれてから日常生活の中でデジタル技術を応用したおもちゃや生活機器に囲まれて育った世代です。ところが、その親の世代である55歳から60歳台の方たちは、デジタルに対しては、やはり身構えがちです。デジタル技術に対して、親子の間に大きな壁ができるのは、この差による違いです。

前期・後期高齢者の方では、デジタル社会が進むと、その社会変化に乗り遅れ社会全体から見るとこの流れに乗れない方を出してしまいます。そうならない為にもDXの利活用に関する議論は、世代を超えた広範囲な人々による、多様な議論が求められる全世代に対応できる、機器の取り扱いも含めて、全世代対応型の議論が必要です。

こうした意味からも、この市民構想会議は一体、何を期待し、議論する会議か問い直す議論がこの点でも必要です。ここはやはり原点に戻り、今一度、考えてみる必要があるように思います。前回の田村先生のお話は、記録を拝見する限り、DXを軸に沼田のまちづくりについて諸条件の優れた特異性をあげて種々、結論付けられていました。技術論から引き出されたご自身の結論ですが、ひとつの意見として、それを参考にしつつも、結論を導き出す役割は皆さんにあります。皆さんの貴重なご意見を集約するこの場で合意形成の意思をもって結論づけられるのがこの会議の目的だと思います。

その結論の出し方の手掛かりとして私は3つの問いかけがカギになると考えました。メモにも記した、①今日・明日の「暮らし」の問題、②もう少し先の「現実」問題、③未来の問題、この3点です。市民構想会議は、沼田の未来のまちづくりを構想する会議ですから、①の「明日の暮らし」の課題解決は市役所の当該窓口に行き相談すれば、済むように思います。②の、もう少し先々の問題であれば、市民生活の質を高める創意や工夫の議論と実施となり、それは市役所と市民の相互協力による「共助」の議論となります。共助によるまちづくりの議論であれば10年先15年先くらいまでを考えて、未来のまちづくりを議論する事も可能です。しかし、この程度の先読みではこれまで「金太郎あめ」のまちづくりと揶揄された、どこの街も同じような無個性でつまらないまちづくりとなった反省が実証的研究でも明らかにされており過去のまちづくりということに陥ります。

箱モノづくりではない、街に住む方々の情熱によって特化されていく独特の個性あるまちづくりは10年や15年では無理があります。まちづくりは可能な限り、50年・100年先を見すえて、そこに熱い夢を思い描く議論を重ねその考えを粘り強く継続していく取り組みが価値を帯びてくると、様々な事実からも結論づけられています。

そうすると、③の、この市民構想会議は、明日の話よりも、もう少し先の現実の話を超え、皆さんが真摯に、自分事として考えられ議論される、熱い思い入れが求められる議論ということになります。その事は新しい社会変化の波であるDXをどう取り入れていくかという議論にも重なり、結びついていく話でもあると思います。この町に生き続ける孫子の世代までを考える、ロング・スパンの議論が必要になるのです。

その議論の中にこの街が抱えるこれからの(1)農・商・工を含む、経済・産業の振興のためのDX問題も、(2)観光・文化の振興・奨励の為のDXも、(3)市民生活向上の為のDX問題も、(4)社会的弱者の方々の為のDXも含まれ市民の皆さんの思いが様々な形で有機的に関連付けられていくと考えます。

私的印象ですが、およそ30年近く当地にご縁を得て以来、この市民構想会議でお世話になり7年目を迎えた、県外者の私の目からは、セットバックした通りが随分と整いはじめ、シンボリックな文化遺構が街の中心に集められ、素敵な雰囲気になってきたと実感しています。関係各位のご努力の賜と想像しますが、長い時間を掛けて、沼田の文化遺構を中心に沼田の顔となるこれらの遺構が、今後は大きな意味をもつとの確信のもと、進められてきたにちがいません。既に

その成果が関心のある市民の間で予感され始めているのではないかと拝見しています。

これが「未来」の沼田をアピールする、他の地域にはかえがたい夢の核のひとつとなる条件が形成されつつあると、県外者の私も強く感じます。この取り組みは恐らく50年あるいは100年先にもつなげたいという意思の先行実施と想像しますが如何でしょうか。多くの人々を集める世界の観光都市には、文化遺構を核として、そこを訪れる人々を対象にした様々なビジネスが裾野を広げ、豊かな経済活動につなげています。本物の歴史的遺構を基礎に、この街がもつ潜在力が花開き、将来それが大きな力となる事実を、広く市民の皆さんに、分かりやすく発信していくか等の議論が、まさにDX問題と重なり合う取り組みにもなると思います。

日本では全く別の分野から、長い時間に耐え抜き継続されてきた活動の意義について社会的に再評価する機運が高まっています。「100年企業」です。今から100年前になる昭和の大恐慌から太平洋戦争へ、戦後の混乱期から高度経済成長へ、バブル経済の崩壊と続いた「激動の昭和」から、「縮小の平成」へと時代は移りました。が、今また「崩壊と転換の令和」に突入した時代を迎え、企業活動を100年以上にわたり維持してきた取り組みが経済界を中心に再評価され始めているのです。

目先の事に目を奪われない確かな信念と行動力によって、100年を目指す姿勢が、今こそ求められているという警句がここには込められているように感じます。私はこの会議も、そういう性格をもった議論の場であって欲しいと考えています。異なるご意見があるかもしれませんが、幸福追求には長期の展望とそのあくなき取り組みが求められていることはまちづくりを考える際にも同様に重要な視点ではないかと思えます。

哲学はこうした問題についてどう考えてきたかと言えば、2つの異なる視点の必要性を説き続けてきました。古代ギリシア語で「セミオティカ」と「マセマティカ」です。「セミオティカ」は訳語が見当たりませんので私は「自我(学)」(＝問題提起・学)と訳しています。私または私たちが、“本当はどうしたいのか”を明快にすることを指しています。次の「マセマティカ」は、それを解決する考えや技術を意味し「解決(学)」(＝問題解決・学)と訳しています。言葉どおり、こちらは解決する知恵と技術です。英語の「マセマティクス」「数学」の語源です。数学には必ず答が求められており、解決できる各種の技術や手法や工夫を指す言葉です。

今から2400年前の古代ギリシア人は幸福追求にはまず、“自分はどうしたいのか”が自らに問われるべきであり、技術はその解決の為に求められる必要な知恵や工夫と考えました。これが15世紀のイタリアで人間性の回復をうたう「ルネサンス」運動が起き、事実(ファクト)の尊重が叫ばれます。人間の幸福追求には、何よりも事実の尊重が最も重要な条件と考えられました。この考え方は近代科学の基礎付けをうながしました。それを進めたのは16世紀末のフランスの数学者で哲学者のデカルトでした。彼は「数学」こそが、事実(ファクト)を明らかにすると考えたのです。

デカルトは「われ思う故に、我あり」の名言を残した哲学者でしたが、事実をどのように疑ってみても、疑っている自分(我)がいる事実は、疑い得ない絶対的な事実だと事実を知る根源的な根拠と原理を明らかにしました。近世哲学のパイオニアであり科学的な根拠を「数学」に求めました。彼は「人間が幸せにな

る」には数学が科学の基礎に置かれるべきだと主張したのです。電卓の原型と言える手動計算機を考案したのもデカルトです。実は、この発想の延長線上に現代のデジタル技術があるのです。

今では誰もが簡単に利活用できる、工学的に高められた現代技術がおよそ400年かけてデジタル技術として完成したと理解できます。しかし、この事から困ったことに心と体の分断が見逃され続けました。現代の精神病理学の対象が心・身を別物と考えるデカルト哲学から始まった事実は皮肉です。幸福の追求が、心の病を生む原因にもなっているその反省から、現代では「心身の統一（身心一如）」が求められており、心と体を別物と考えない、ひとつの有機体と考える転換が先進国で始まっています。

コンピュータの原型は戦場で使う大砲の「弾道飛距離計算機」が基となっている事は良く知られています。戦争が終わり、その計算機技術の平和利用が現在のコンピュータの元となっています。戦時の技術が平時の民生技術として転換され私たちが知っているコンピュータに発展し、その最先端技術の利活用がDXです。私たちが汗をかかなくても、ボタンひとつ、必要なキーを押せば、私たち人間に代わり作業をする工場のオートメーション等も、その利活用の流れにある最先端の技術文明です。

哲学は、人間を最も大切な存在として位置付けました。私たちが幸せな人生を送る為には、私たち自身を問う「人間（学）」を基礎に、「幸せ創り」の学問体系を構築してきました。ところが、科学が技術文明へと読み替えられていく過程の中で、先に述べたデカルト哲学の解決学としての数学が科学の基礎と位置づけられあらゆる問題解決に「数学」が優先されることとなりました。数学を基礎に、物理学、工学、生物学、化学、薬学、医学と位置づけられ、最終的に「人間」を数学とは最も遠い位置付けとして置き続けてきました。解決技術を尊重するあまり、これが人間軽視の契機を生む流れの基を生み出しました。デジタルが産み落とした社会の影がここにあります。

「数学」は天動説から地動説への転換を促す天文学にも活用され、ニュートンのリンゴの落下による万有引力の発見にもつながる自然現象の解明にも大きな役割を演じました。こうした事実の積み上げから数学的解決が社会的にも市民権を与えられ数学はやがて機械工学の発展とその技術改良にも大きな役割を果たすようになります。現代では株取引の最前線では、最新の数学理論が活用され、著名な数学者が証券会社の顧問を務める時代です。あらゆる分野に数学が活用されているのです。

しかし、その一方で、社会的に人間の軽視や疎外が進行しました。デジタル化社会の加速は従来の不便を「利便性」の向上に、非合理を「合理性」を伴う状況に、非効率を「効率化」する社会へ向かわせる技術として要請され、人間の位置づけを軽視してきました。私たちは生き物として、利便性や合理性や効率化にのみ満足する生き方には耐えられません。多くの人々が、利便性や合理性や効率化を追求する、デジタル社会の中で、不便で非効率なソロ（一人）キャンプに熱中し、自然の懐に飛び込んでいく姿は単なる一過性の流行と片づけられない、人間としての「心のうずきの問題」がそこに見て取れます。自然に身を投じる行為を通して、本当の自分を探し求める「自分と向き合う」姿がそこに見て取れるからです。現代の合理的な生活に逆行するかのようになり、利便性から遠く距離をおいた時間と空間を求める姿は、利便性や合理性や効率化だけで解決できない人間の「命の要請」があるからに違いありません。

これまで長らく軽視されてきた、新しい価値観の息吹が、人間存在の新しい価値観として、従来の価値観を乗り越える生き方として、市民権を得ようとし始めています。こうした分析に力強い理論的根拠を示す思想家がいま世界で話題となっています。

これまで述べてきた問題を、最新の思想界で活躍する哲学者はどう考えているか、お伝えしたいと思います。ドイツ哲学界のスターとして著名なソウル生まれのビョンチョル・ハン氏はヨーロッパ哲学界で、脚光を浴びている思想家です。現在ベルリン芸術大学で哲学と文化理論を教える哲学者です。ハン氏は、20世紀が過剰に働くライフスタイルが積極的に肯定された「ハッスル・カルチャー」時代だったと述べ、それを「疲労社会」と名付けました。誰もがハッスルする、その疲労のためにあえぎ苦しんでいると指摘しています。「疲労社会」はハン氏の言葉ですが、子供も大人も老人も男性も女性も、誰もが疲労する社会に生き疲れていると述べています。21世紀の課題は、この疲れを回復するよう考えることが重要で、DXは活用次第で、私たちをこの「疲労」から解放する、優れたもうひとつの価値だとも述べています。

DXの否定ではなく、人間らしい暮らしを回復するために、「疲労社会」の脱却がDXに要請されているというのです。背景にあるのは、競争社会に生きる力として求められ続けてきた高い知能（IQ）への期待があり、学歴をはじめ他よりも優れた力や能力を持つことが、人間として立派なことだと評価されてきたことも「疲労社会」を生んできたと述べています。速い、大きい、強い、高い、巨額な財などの価値観が定着し、気がつけばこれによって誰もが疲れる生き方を、不本意なままに受け止めてきたというのが、ハン氏の見立てです。果たしてこんなことで、私たちが本当に幸せになれるのかという訳です。数学的な理解と価値観を近代文明の病理として、知能のみを測る「IQ主義」を考え直す時にきていると主張しています。

文明の病理を乗り越える新しい価値観の転換として、「人間らしさのモノサシ」が社会的に求められているという訳です。高い知能にもまして、むしろDXやデジタル化が進むと、「心の知能指数」（EQ）が一層、重要な条件として私たちに求められると言います。DXの活用が進めば進むほど、今後は心の知能指数（EQ）の基礎である感受性がこれまで以上に社会的に認識され評価され私たちに求められると指摘しています。

デジタル、DX社会のもう一歩先の社会に期待される、人間的な優しさや穏やかさや、心の広さ、人としての大きさがありのままに感じられる、精神的安定としてあらゆる分野で、新たな「人間学」が求められていると述べています。前回の田村先生のお話ではこの沼田周辺は他の地域に比べて、豊かな自然があり、多くの人々がそれを求めて沼田に熱い視線を向けている事実から、そうした事実をより多くの人に知って貰えるような取り組みが大切で、DXの活用でそれが可能になるとの指摘がありました。新しい技術の可能性を利活用する時代が来ています。

私たち人間に対する理解の転換が求められているのです。『IQからEQの時代へ』が、DX時代のキーワードです。この認識は、あらゆる分野に当てはまります。人間らしさの評価尺度が大きく変わり始めているからです。IQが高い人がいつも優秀で人として立派だとは限りません。そうではなくて心の知能指数のEQが高い人が、評価される時代が来ているという訳です。心の感受性の高い人が社会的に待ち望まれているのです。この考え方の背景には機械には出来ない判

断が、人間には出来るという理由からも説明できるのです。私たちが人の「心に寄り添う」判断が出来るのは人間を証する大切な点です。痛みや喜びを分かち合える心の働きが再評価されています。

沼田の未来のまちづくりを考える、この市民構想会議にとってもこのような考え方は大切な議論の方向性であると考えます。DXを適正に扱いDXに期待する視点に立った議論が望まれています。私とは異なる人の感情を理解し共感する人間関係を柔らかく温かに捉えられる、心の知能指数の高い力が快適なまちづくりにも求められるのです。EQの高い住民の住まう街が、県外の人々にも魅力的に感じられ、人を集める魅力になると期待されています。人生や仕事の成功の8割は、このEQで決まることも最近では科学的に立証されています。

結論になりますが、私（私たち）が、本当はどうしたいのかが、改めて問われています。「なぜ・何のために」と問うことを含め、ここで議論されると市民構想会議がより深みのある、しかも、広がりある将来の提言に繋がるように思います。

貴重な時間の30分を議論ではなく、ショートレクチャーとしてご清聴頂き有り難うございました。舌足らずな点は、後ほどの議論で補足させて頂ければと思います。

#### 【会 長】

ありがとうございました。先生のアドバイスについて何かご質問あればお願いします。

この後、ご意見を伺う中で、先生に質問等ありましたら、そのときに発言ください。前回から感じていることなど、お持ちの方ありましたら、積極的にお願いします。

#### 【委 員】

かねてから非日常と異日常の言葉が気になっています。沼田の良さを知って、楽しむ生活、それが豊かな日常づくりで、外の人から見ると、いい日常、異なる日常がそこにあるのではないか。非日常はディズニーランドとか、現実的ではないところが非日常です。異なる日常とは文化の違いを指しています。

EQはまさに楽しんでいる、豊かな生活に繋がるが、結局、お金がないと、生活が豊かにならないので、どうしてもお金に固執してしまう。先生のお話の通りだと思いますが、お金をどうやって準備していったらいいだろうか、その辺が少し心配です。

#### 【会 長】

今のご発言に対して、特に何かございましたら…。先生、すぐに大丈夫でしょうか。

#### 【篠田先生】

大丈夫です。委員さんの人とし、親としてのご心配は良くわかります。EQを高める方法は様々にあると思いますが「自然」との触れ合いが最も身近で大切な事かと思います。EQを高めることは必ずしも経済的条件に制約された話ではなく、むしろ意識の転換に関わる話ですから経済的制約さえ乗り越えてしまえる大らかなポジティブ（肯定的）な生き方につながる感性の問題です。人もうらやむ巨額な財を持つ人が、本当に幸せで人の痛みが分かる人かと言えば、必ずしもそうではありません。反対に「貧者の一灯」という言葉があるように、世の中には貧しくても人の為にお金やモノを気持ちよく出す人も多くおられます。私は経済が総てだとは思っていません。



これまでも多くの宗教家や思想家や科学者もまた「自然への畏敬（いけい）」と「母の無償の愛」をあげて、その大切な意義を語っています。人間の精神形成に最も重要な条件のひとつに、命の根源の「自然」と「母の無償の愛」をあげている事実は古今東西、変わりません。親として子供の将来の為の蓄えに励む。子ども達の思いに応えられる親の責務として、金銭的不自由を味わわせたくないというけなげな想いは、年齢を重ねた分だけ、私にも良く分かります。今、議論しようとしているEQの必要性はそうした問題を乗り越える力を得るにはどう考えたらよいかですね。

今日の会議の冒頭で、会長さんの最初のご挨拶にあった『社会・経済・文化の重要性をコロナ禍後の社会に向って議論し、取り組む時が来た』という認識をそのように捉えれば、今がその議論をする好機ともいえます。

前回の講師を務められた田村先生の指摘にある、沼田の地理的条件、自然条件などは、幼い子供たちや青少年の人間形成にとって良い影響を及ぼす優れた条件です。年齢を重ねた人々には、自然は心を癒し元気を与えてくれる力にもなっているように思います。ここは首都圏からも近く、アクセスに恵まれた立地条件が備わっています。その意味で、これまで以上に、沼田がアピールできる素材を広く多くの皆さんに知って貰う取り組みは大いに議論されて良いと思います。多くの人に沼田の良さを知って頂く方法のひとつにDXがあると、田村先生は指摘されていたと思います。

心配し過ぎも、考え過ぎも、伸びやかさが失われ窮屈ですね。老後に2千万円必要という話もありましたが、人口減少の中で人口が減っても豊かな暮らしができる知恵を出しあい考えあう時に来ています。機械に代替できることは積極的に進めることで私たちの労働量を減らし、私たちは人らしい生き方にエネルギーを注げるようになる可能性があると考えます。そのために必要な社会制度やシステムを地域の未来のためにDX活用を視野に入れて提案できれば、それは新しい未来に向かって進むことになると思います。

【会長】

ありがとうございました。それではどうでしょうか。

【委員】

幸福を追求、あとは感じる知性を育てる、そのための手段としてDXをうまく使っていくのだろうと思いました。比べることによって沼田は良いと分かる。比べつつも沼田市の良さを分かってくると良いと感じました。

【会長】

まちづくりへの意見など幅広く、DXを睨みながら、ご意見をしていただければいいかなと感じています。

【委員】

昔、人口を増やすのに企業誘致だとか、学校を持ってくるとか、起業とかで人口を増やすことが沼田の発展に繋がると協議してきました。今度は、安全性を高めるという意味で、インフラも含め、自然も含め、議論を深めていくことがこれからの沼田の明るい未来へ繋がっていくと思います。

【会長】

前回もご意見いただきましたが、いかがでしょうか。

【委員】

AI を利活用するのを 100% 否定する人はいないと思います。問題はそれを管理する人です。いわゆるコンピュータは人間の能力を超えているが、感情はありません。これからは人材育成に力をいれる必要があると思います。

何らかの形で提言するということになるのと、いくつかのテーマに分けて、いつまでに出すのか確認させて欲しい。

人の育成を前提に農商工、自然を活かした観光振興がひとつのテーマ、マイナンバーカードを使った行政サービスや交通インフラの整備、医療福祉のDX化など、日常生活や行政サービス、医療・福祉が二つ目、最後に人材の育成、ネット社会で生きる力をしっかり養成し、DX をしっかり進めていく。ある程度論点を絞って、語っていければと思います。

【会 長】

構想会議のスケジュールについて事務局から説明してください。

【事務局】

今年度中にまとめたいと考えております。月に1回程度開催して、年度内に意見を出していただき、年明けに収束、2月の会議で概ねまとめることができればと考えています。

【会 長】

ご意見あればお伺いします。

【委 員】

日本各地どこでもやっているような構想の考えではなく、沼田だからこそそのEQ を高め、それをDX という手法を使ってやっていくことだと思います。

沼田の良さは、外の事例にはなく、自分たちで見いだしていく、あるいは外部の人が見ることで沼田の良さが見えると思います。

こころ豊かに暮らすために、まず、一つ目は「食と農業」、二つ目は、観光振興、三つ目は人口減少対策だと思います。ここに住んでいるからこそ味わえるもの、沼田にある異日常と非日常という要素、交通の便が良く、気候が快適で暮らしやすい沼田ということ、それらをうまく発信し、広く若い世代に浸透させていかなければならないと思います。

【篠田先生】

従来のまちづくりは、全国的に見てどこの街も「足し算」でした。住民の方々からあれも欲しい・これも欲しいという調子で、街のインフラ整備の拡大が各地で進められました。しかし91年の「バブル経済」の崩壊後、日本は縮小均衡型の経済状況に追い込まれ否応なく「引き算」社会へと転じました。国が進める行財政基盤の強化から、政府主導の(99年＝平成11年)市町村合併が進められ、自治体の広域化が進みました。こうした逆風の中でも、成功したまちづくりはあり、成功例に共通した特徴は、街の誇るべき資産を核にして徹底的に「引き算」(集約)されたまちづくりでした。背景には社会全体で引き算が自然な流れと理解されるようになった事も好条件でした。しかも、少子高齢化による人口減少が、誰の目にも明らかになっていったからです。

多くを望めなくなった社会背景からは、核となる目玉を決め、しっかりと見定められた、その核を中心にしたまちづくりが、着実に成功を収めるようになったのです。国内外でもそうした成功例はいくつかありますが、「何も足さないまちづくり」で成功したフランスのまちづくりの例をここで紹介したいと思います。プロヴァンという町です。パリから車で一時間くらいの距離にあり、広大な農業地帯の真ん中にポツンとある幾分、さびれた景観の街です。発音から南フランス

のプロヴァンスとよく間違われる町で、ここはフランスの観光地としては、珍しく何にもない、見渡す限り農業地帯に囲まれた人口1万人前後のひっそりとした街です。中世の城郭が半ば崩壊した、そのお城を中心にした町です。管理は行き届いていますが、しかし、それに新たに手を加えて修復する訳でもなく、さびれた城を中心に静かな町の営みがある、遠い過去へと誘われる不思議な詩情を醸しだしている中世フランスの趣を伝える街です。

ところがこの街にパリから訪れる人が絶えません。大統領夫妻や著名人が大都会のパリの喧騒を避けて、食通をうならせるミシュランガイドで有名なレストランや周辺の空気を味わうために、この街にやって来るといいます。地味ですが、豊かな農産物をはじめ様々な食材があり、それを買い求めるために訪れる人も多いのです。街中を散策しても日中でさえ、もの音ひとつ聴こえない静寂な中、観光客も歩いてこの街の散策を楽しむという具合です。車で街中には乗り付けられない規制があり静かな街と、豊かな食材、長い時間に耐えてきた崩れゆく中世の城など、その風情が人々を引き付け続けています。この事例から学べることは、私たちが観光についても、そろそろ頭を入れ替える必要があるということです。まちづくりの核が絞り込まれている事実です。

昔風にいえば箱モノの施設を作る「足し算」をすることで人を集める外向きの限界が、日本中のまちづくりを苦しめているように思います。しっかりとした核を定めてそれを煮詰め、そこに付加価値をつけていく。時間はかかりますが、これが王道です。

街全体をどういうイメージにしたいのかの議論を詰めることによって、DXの活用がどうあるべきか本来的な議論につながっていくと思います。DXも技術である以上、プラスとマイナスがあり、プラスイメージには優れた可能性があり、マイナス・イメージからは私たちがこの技術によって不当で不利益な扱いを受けかねない恐れがあることが分かります。引き算は成熟した先進国が王道としている考え方です。何を最優先に考えるか、物事の優先順位が分かっていると出来ません。

古代ギリシアの哲学者のプラトンは著書『平和論』で、「順番を間違える」ことで混乱が起き、戦争（状態）が起きると指摘しました。順番を間違わない判断の根拠は絶対価値にあります。相対価値を前提にしている限り様々な変化に対応出来なくなる矛盾に陥り、混乱や騒乱が起きるといいます。引き算には絶対的価値が求められるというのがプラトンの考えであり、この考え方は現代にも通じているように思います。

そのためにも沼田はこれだという動かしがたい価値を見出す議論が必要です。その上で、それをどのように多くの人々に伝えていくかです。EQの必要性は産業・経済・暮らしにも求められており、分野ごとのDXを丁寧に深く議論していくテーマ設定が必要だというご意見も、その通りだと思います。自然は人間には作れません。古くから自然は神様からの贈り物という考え方があり、民俗学的にも文化論からも容認された理解です。それを私たちがありがたく活用させていただく、活用も自然を壊す方向ではなく、引き算の方向で活用させて頂く姿勢が望まれています。

【会長】

ありがとうございました。

5分位休憩ということですのでよろしいでしょうか。

【会 長】

それでは再開をさせていただきます。

【委 員】

奥山に行くと素晴らしいところでした。ところが、身近なところを見てみると、間伐が施されていない山が多く、本当に山が荒れしまっている。それと共に耕作放棄がいたる処にあります。

利根沼田の観光農園、コンニャク大規模農家など後継者がいません。鳥獣駆除に関わる銃猟する人も減っており、なんでこんなに猪や鹿がでるのかというと、耕作放棄地と山が荒れているのが理由です。農地や山林を整備する必要があると思います。

沼田高等学校と沼田女子高等学校の統合が問題になっているが、高校入試の募集状況で利根沼田はどこもマイナスの状況で、利根実業高校、利根商業高校まで含めて考えないと問題ではないかと思います。

沼田方式的なことを、若い人に任せるというより、みんなで知恵を働かせてやっていくことが大切だと思います。

【会 長】

ありがとうございました。

多方面にわたる課題等について、種々ご発言いただきました。

【委 員】

非常に優良な耕地が放棄されて、作る人がいないが、もう止めようがない状況です。

日本に100年以上続く企業が三十何社もあるように、家族的な繋がりがある経済による地域社会を持つ民族であります。コロナで大きく時代が変化し、生活様式が変わりました。我々は変化できないと生き残れないのです。負の遺産ばかり目が行きがちですが、若い人たちの話しを聞いた中で、若い人たちが安心して生活できるまちづくりが必要だと思います。

今、地元の職員募集で人が集まりません。100年先、沼田市がきちんと生き残る方策、子ども達が安心して沼田で生活できるようなまちづくりを目指して何が必要かなということが一番であると思います。

デジタル化も進むでしょう、それに我々がついていかなければならないと思います。これからお年寄りの方も平気でパソコンがいじれるようになることを予想し、この10年の間に世の中が大きく変動するというふうに考えています。一番に変わるということが条件だと思います。

【委 員】

学校教育の中で、ゆとり教育がありましたが、その後にゆとり教育だけだと子ども達の学力が下がったということで、それを補う形に変わってきました。IQやEQを考慮して、修正しながら進むことが必要だと思います。

「回す」がひとつのキーワードかなと思います。社会を回す、人やモノ、金です。そういったものの中に、うまく組み入れるような形が作られると沼田の良さがもっと生きてくると思います。

【会 長】

お願いします。

【委 員】

青年会議所は40歳までのメンバーで構成されて、みんなでお金を出しあって事業を行っています。登録するメンバーもだいぶ減ってきています。人が減ること、子供達が減ること、若い人達が減ること、お金っていうのが減ってきてしまうのかな、先細りになってしまうのかなって感じております。

篠田先生がおっしゃるように5年、10年後、15年度くらいのスパンで考えるとやはりどの地域も同じような状態に陥ってしまうというところがあるので、利根沼田の良さ考えながら、魅力というところを引き出しながら、利根沼田独自の路線を持って進んでいけたらいいと思います。

#### 【委員】

補助金をもらっていると、うまくいかなくなってしまうと考えています。補助金をもらう時代ではなく、何か違う発想をしないと駄目だと思います。

耕作放棄の畑と山林の荒れているのは、中山間地域の畑は規模拡大できないから、借りてくれる人がいない、山林は間伐しても売れなくて、ただ経費が掛かる、収入が少ないのに村の人にやれって言っても誰もやらないですよ。

いい議論をしても、自分の家の耕作放棄地とか、ただ作ってくれて貸しても、鹿とか猪にみんな食べられてしまう。頭で議論やっても、できるかといえませんができないですよ。

今年はアップルサイダーとカレーを東部商工会で作りました。観光協会でも売りましたが、沢山作るとコストが下がるので、商店の人にも利潤が出ます。tengooで買ってくれば、地域でお金が回ってくれます。

ある程度助け合ってできること仲良くやって、良くなるようにしたいです。

#### 【委員】

人間が本当に勉強しなくてはならないのは人間学だと思います。学生の時歴史学を学びましたが、人間の行いが歴史になり、それを記録して歴史書が作られました。人間は人間のことをもっと知るべきだと思います。

金融機関の仕事はフェイス トゥ フェイスを重んじています。ペーパーレスなどデジタル化が進むほど、私たちのフェイス トゥ フェイスの価値は上がってくると思います。だから両方大事で、デジタルを道具として使っていけば良いと思います。あとは人間の繋がりを大事にしていくことだと思います。デジタルトランスフォーメーションは、人間がこの時代に変わっていくひとつの問題提起だと思います。

#### 【篠田先生】

今後の、議論の捨て石にして頂く素材として、お聴き頂ければと思いますが、私は20世紀末から今世紀初頭のおよそ30～35年までに、『世界中で1000年単位の文明史的大変革期が起きる』と各種の研究から捉えていました。90年代の初めに書きあげた拙著の中でもその分析成果を記しました。今回の大変革は勿論、1000年前と形は異なりますが、両者には共通性が見て取れます。

文明史的大変革には、世界観や社会生活を激変させる技術革新が従来とは全く発想を変えた形で起きる事実です。工学的な技術革新と分子・遺伝子レベルの生命科学の進展です。およそ千年前はそれまで無かった歯車の発明があり、その工学的活用術の発展が社会で急速に進みました。印刷術による新しい情報革命を推進したのは紙の製法の普及です。錬金術は化学への道を拓き、生物学・医学・薬学など科学的展開の道筋をつけました。人体解剖が積極的に進められたのもこの時期です。数学への関心が、円と楕円の数学的発見へと導き、私たちの意識を地球から天体の星への関心におし広げました。目視からは得られない現在位置の確

認は情報が無い砂漠の移動技術でしたが、これが海の移動技術へと読み替えられる知的活動の社会変化が経験航海術から、星の観測を基礎にした、測天航海術へと導き大航海時代への道を拓き、社会を大きく変えました。

パンデミックは歴史上、度々、繰り返されてきましたが、今回のコロナウイルスによる感染症被害は世界中にまん延し「パンデミック」を引き起こしました。前回のパンデミックはスペイン風邪が引き起こした悲劇でした。この感染症は第一次世界大戦を追うようにヨーロッパ全土に感染拡大しました。戦争の終結から、第二次世界大戦勃発までの「戦間期」は僅か20年でした。悲惨な戦争が忘れられた平和な時間は僅か20年で、気が付けば、さらに恐ろしい悲劇を生む戦争が始まったのです。歴史家はこの愚かさを「オンリー・イエスタデー」（つい昨日のこと）と表現しました。

第一次世界大戦では、工業化の進展により、大量殺りく兵器が増産され機械化戦争が進み、生物兵器の毒ガスが作られたことは、ご存知の通りです。数学の活用によって機械工学の技術精度を上げる取り組みが、悲惨な現実を生み落としたのです。委員さんご指摘の“人間の問題に戻る”が求められながら、それが省みられず新たな悲劇へと、突き進んだのが20世紀前半の歴史でした。

第二次世界大戦後は、戦勝国アメリカを中心に、機械工業化による大量生産と大量消費を基本にした経済が、戦後世界のビジネスモデルになりました。その後、米ソの冷戦が続き、米国はベトナム戦争による過剰な経済的負担の軽減策から「パックス・アメリカナ」（世界の警察国家・米国）の放棄を宣言し、ニクソン大統領は米ドル紙幣と金の交換を停止する「金本位制」停止に進みました。その歴史的な大転換から、今年で丁度50年目の節目を迎えています。経済活動による制度上の様々な矛盾や、非対称の国際関係がもたらす外交問題など、世界は未解決問題に溺れています。

「人間とは」の問いかけが待ち望まれており、誰もが幸福な暮らしを考える時代が目の前に来ていますが、課題解決には遠い現実が山積しています。人口減少は従来の人口増加時代に考え出された手法やまちづくりがもはや通用しないお荷物になっています。人口減少は納税者数の減少を意味しています。そうした基本的な認識に立ち返って今こそ未来の豊かな社会を構築するための「ロードマップ」の作成が必要です。

あらゆる課題の解決には確かな現実認識と、それを基礎に計画性ある準備や対策が望まれています。この地域も例外ではありません。私たちは文明史的大変革期に生きているという自覚が何よりも大切です。誰もが、心ゆたかに生きる社会はどうすれば実現できるかという議論は、これまで不十分なままであったように思います。

先ほど申し上げたZ世代はデジタル時代の申し子ですが、デジタルを全面否定したら、私たちは現在の暮らしの根幹にかかわる相当部分を否定しかねません。むしろ、多様な価値観を認め合い、楽しく暮らしていける、柔らかな社会を目指すことが増々社会的には大きな意味を持ち始めています。

哲学は幸福学です。幸福とは何かを求める学問は絶対価値の発見とその自覚です。幸福追求の手段やシステムは、高度経済成長以降の日本では、大きく揺れ動いてきました。それまであたり前だと思われてきた相対的価値観が一気に崩れ91年のバブル経済崩壊後は、むしろ私たちを絶対的価値観への目覚めへと突き動かしてきました。

94年以來、日本は長期にわたるデフレ経済に苦しめられ、景気低迷にあえいできました。引き算が当たり前に受け止められてきた若い世代の価値観は、親の世代とは異なる価値観を受け入れ、むしろ暮らしを豊かに味わう落ち着いたライフスタイルに向かっています。古いものが自然に受け止められ、自分が気に入れば問題ないという素直な感覚です。ノスタルジー（郷愁）やセンチメンタル（感傷）ではない思いから、その感覚が尊重されるようになりました。デジタル時代にありながらむしろ古いカセットテープやレコードで音楽を楽しむ、古い機器が持つ温かさが若者を惹きつけています。優しさや穏やかさ、ゆとりが彼らから再評価されているのです。デジタル、DXを中心に皆さんと共に、次回からは事務局で整理していただいた内容に基づき優先順位を決め、皆さんのご意見を頂き、この議論を詰めていければと思います。

**【会 長】**

次回は11月11日の木曜日午後2時です。

欠席される場合は、メモでも何でもファックスでも結構ですので、送ってください。それでは以上で議事を終了させていただきます。

**【事務局】**

それでは以上をもちまして閉会とさせていただきます。